

## 回鶻文の天地八陽神呪經

### 解題

明治四十三年春、當時支那新疆省の探檢に従事せられし橘瑞超君が、大谷伯爵に致せし發掘品目錄中に、丈餘の回鶻語卷子一卷と記されたるを一瞥したるとありき、歐洲にては夙くより獨逸、露西亞等の諸碩學が、等しく新疆より得たる回鶻文書に就きて眞摯該博の研究を試み、其の結果を發表したりしも、當時は未だその數も量も極めて乏しく、僅かに一葉二葉の斷片の順次發表せらるゝの有様にすぎず、就中千九百八年に出版せられたるミューラー氏のウイグリカ (Miller, Uigurica) に收められたる金光明經斷片及び、翌千九百九年出版のラドロフ氏の摩尼教の懺悔文クアスツアニフト (Radloff, Chustuanift) 等を以て稍々長篇と見るべき有様なりしを以て、其の頃余は此國語に於て殆んど何等の知識を有せざりしに係はらず、此一卷の資料に就ては深き興趣を感じたりき、爾來歐洲諸學者の研鑽益々進み一昨千九百十一年にはミューラー氏はウイグリカ第二卷を公やけにし、ルコック (Le Coq) 氏は英のスタイン氏の新たに得たるクアスツアニフト(前出)を解き、ラドロフ氏亦た Kuan-si-im Pusar の名を以て法華經中の普門品を解説し、我が國にても觀無量壽經の斷片一葉は二樂叢書第一號に於て解釋せられたり、此の如く此の國語を以て記されたる文學にして、今日世に出でしもの漸やく多きを加へ、従がつて其の文化及び言語は大